最新鋭スキー技法の具現者たち

栄冠を求めて

連載第5回

文・志賀仁郎
写真・上田　勉、武山　登

日本の独特なウエーデルン信仰は、なぜ生まれたのか？
かつての革新的なすべりの技法はどのように生かされていくことになるのか？
そして、世界の最新のスキー技法研究の中における日本の評価とは？
本当に求められる速さと強さのすべりとはどんなものなのか？
技術選のピステに見られる最新鋭スキー技法の行方を展望する。

古典的なウエーデルンの復活

ウエーデルンと呼ばれる技術が、大きく進化したのは1970年代の10年間だったと前号に紹介したが、その世界の流れの中で日本のスキー界もまた大きな前進を遂げている。

技術選の30年の歴史の中に、藤本進・平川仁彦時代と呼ばれる時代がある。その時代が日本のスキー技法の革新の時代だったと言えるだろう。

佐藤正人（93技術選）
日本のスキーが様式美を追求していた時代その極みにあったスキーが佐藤正人のウエーデルンであった。大鰐での第22回、速さ強さが評価の基準となったその転機にも佐藤は見事に対応して、緩ヴェ、急ヴェともに種目のトップを占めて、その正確で美しいスキーは、強さ、速さを合わせもつ完成度の高いものとなっていた。それはすでに重厚といえるレベルに達していたのである。日本人が求めたスキーの頂点といえたであろう。

その革新の時代は、曲進系の教程から、より普遍的な教程へとする、改訂によって、消滅してしまった。

その結果、日本のスキー界に生まれていた技術革新の流れは澱んでしまったのである。

お行儀のいい美しいパラレルターン、ウエーデルンはまたまた高度な技術としての位置に配され、古いオーストリア教程にあった古典的なウエーデルンへの信仰は復活した。

バッジ検定、準指、指導員検定という、日本独自の制度が古典ウエーデルン復活の決定的な要因になっていたようだ。

曲進系はあまりに前衛に過ぎ、バッジ検定の内容基準を作ることができない。どうやってスキーの上手下手を判定するのか。30年も同じ技術で検定してきたのに、一気に新しい考え方に変えることはできない。といった、もっぱら制度を維持するための都合が優先していた。

日本は、ガルミッシュパルテンキルヘンインタースキーからビソケタトリインタースキーにいたる4年間に世界のスキー界にあって、技術開発、研究の先進国フランス、オーストリア、ドイツと並ぶ地位を獲得し得たのに、この古典回帰によって、その地位を自ら放棄してしまったのである。

オーストリアでは73年、75年と新教程を発表、フランスのジョルジュ・ジュベールの論文も、72年、76年と発表され、新しい技法が、紹介されている中で、日本は、古いオーストリアメソッドにこだわり続けていた。

すでにウエーデルンという言葉は、世界中のスキーヤーの頭の中から消えていた。本家のオーストリアでさえ、その技法は消え、ウエーデルンを口にするスキーヤーはいなくなった。ウエーデルンは日本にしかない技術、日本にしか残っていない言葉となっていたのである。

今、オーストリアでは、日本でいうウエーデルンに相当する技法は、クルッシュブング（小さなターン）と呼ばれている。日本でもようやく、デモたちのトレーニングなどではショートリズムのターンと呼ばれるようになったが、まだ検定や技術選の種目には、ウエーデルンという言葉が残っているのである。

藤本進の指導による様式美のスキー

尖鋭技法の時代は曲進技法を生んだスーパーデモ、藤本進、平川仁彦、関健太郎らの引退によって幕を閉じ、続いた古典回帰の時代は、丸山隆文、佐藤正明、さらに藤本既舎と呼ばれた小賀坂グループの若者たちによって築かれていった。

すべてに完璧を要求する藤本の指導は徹底していた。様式美のスキーが完成されようとしていた。

日本のスキーは、デモ選を頂点とする巨大なピラミッドを形成していた。そうした状況の中で、頂点に立つデモンストレーターたちの役割はきわめて大きく、その影響は、想像を越えるものとなっていった。

吉田幸一、佐藤正人、細野博、石井俊一ら

吉田幸一（90技術選）
佐藤と並び、藤本一門のエースであった吉田のスキーは、しなやかであり華麗であった。
佐藤を剛と呼べば、吉田は柔と評価され、ふたりは日本のスキーの理想像として、SAJスキー教程のまったき具現者であった。速さ、強さの時代に入って、その繊細なスキーは、やや不本意な評価の中に埋められてしまったけれども、切れ、走りというテーマにおいて、なお最上の味わいを見せているのである。

Zin Shiga

のスキーが日本人のスキーの理想像になっていたのである。

デモ選は79年の第16回を最後に、80年以降には基礎選とデモ選とに分離されたのだが、その基礎選と呼ばれた時代は藤本厩舎の時代であった。

80年の大和ルスツでの第1回基礎選から始まった吉田幸一、佐藤正人の時代は、ウエーデルンが日本的なスキーとして完成されていった時代であった。

吉田1位、佐藤2位と、ふたりのエースが大躍進を果たした第1回基礎選の緩斜面ウエーデルン（当時は規定ウエーデルン）でふたりは、佐藤277点、吉田276点と、この種目の1位2位を占めたが、そのすべりは、あのフランツ・フルトナーが演じたウエーデルンよりもさらに美しいものであった。

同じ第1回基礎選での急斜面ウエーデルン（応用ウエーデルン）は、佐藤がまたまた277点の高得点を上げてトップに立ち、吉田は268点で7位となっている。

この急ヴェは、完璧に整備されたフラットなすべりやすい斜面で行なわれ、それ以前のデモ選、現在の技術選のこの種目とはかなり状況が異なっていた。佐藤正人のこの種目のすべりは、他を圧する見事なもので、その後、日本人のスキーヤーのすべりに大きな影響を与えた。

緩斜面、急斜面と状況がかわるとそのウエーデルンは、緩斜面では、古典的な、オーストリアスキーのウエーデルンになり、急斜面では、曲進系的な吸収形のウエーデルンになることがこの当時確認されている。

ふたりは、この80年の第1回基礎選以降、87年の技術選まで、つねにこの種目のトップを争い、分離された第17回（80年）デモ選以降第21回まで、デモのトップを争っている。

吉田幸一の見せた走るスキー技法

84年85年と2回続いた大鰐での技術選は、日本のスキーに大きな転機が訪れた技術選だったのだが、その85年の第22回と数えることになった技術選でのふたりの緩ヴェの演技をここで回想してみよう。

85年秋の本誌ブルーガイドスキー86第2集に私はそのふたりのスキーを次のように報告している。その一部を紹介しよう。

「佐藤（正人）の切れのいい、しかも重量感をも感じさせる力強い正確なスキー。そのスキーの対極にある吉田の流麗でしなやかなスキー。それは、剛と柔。そして華麗と優美さといった、対比を思わせる。

硬いバーンを正確に力強く踏みしめる佐藤に280点。流れるようなリズムを感じさせた吉田に277点と高得点が出て、この種目の1位2位にふたりはならんだ。

2日目、硬く凍りついた斜面は、さらに高度を増し、厳しいものになった。上部の急斜面は、スキーのエッジをほとんど受けつけないほどハードなものだった。

急斜面ウエーデルンに注目した。この斜面に日本のトップスキーヤーを目指す名手たちが、どんな内容のスキーを見せてくれるだろうか。今日本のスキー界が求めている強いスキー、切れるスキーはどんな形でこのハードな斜面を切りさいてくれるだろうか。その回答がこの斜面のこの種目に出るはずであった。

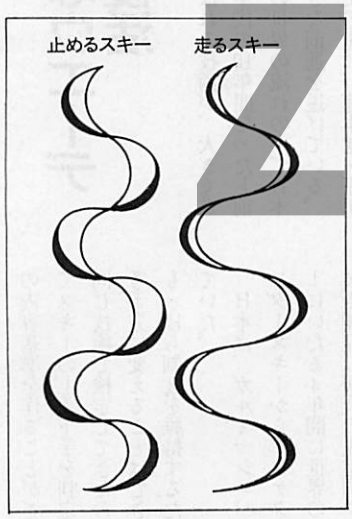
佐藤が、重厚な風格あるすべりでこの難しいピステを征服した。

軽快なリズムで吉田が舞う。実に楽しそうだ。氷と闘うといった凄惨なムードにつつまれていたピステがはなやいで見えるほど、吉田の描き出す曲線は美しい。

175人のスキーヤーの中でもっとも「快感度」の高いといえるスキーを吉田はこのハードな斜面に演じて見せたのである。

しかしながら、この吉田のスキーへの評価は佐藤正人、小野塚喜保、出口沖彦、竹村幸則、斉木隆といった力のスキーより低く、石井俊一、紺野光弘らチームの後輩たちよりも低いものとなった。

強いスキー、速いスキーを求める審判員のイメージの中に、吉田のスキーは入り込めな



渡部三郎（93技術選）
藤本一門の中にあって、渡部のスキーは際立った個性を主張していた。それは速さであり、切れであった。時代が大きく変わる中にあって、今なおトップの座を窺える位置を保ち続けているのは、彼のスキーの速さ、切れが、まだ若いエースたちに遅れをとっていない証しといえるはず。彼の技法は、曲線をつなぐその軌道を雪面にスキーをはりつけて、つねに前にスキーを走らせるという、新しい感覚に満ちている。

斉木隆（91技術選）
速さの時代は、1985年大鰐の第22回の斉木の行為によって一気に加速された。ナショナルチームの滑降スペシャリストからのこの世界への転身は、それだけでも何かを予感させていたはずだが、凍結した急斜面の緩滑での隆のスピードは、それまでのデモ選にはまったく見られなかったすさまじいものだったのである。その後、隆は、高い姿勢のジャンピング系の技法につねに理想像を示していた。

沢田敦（93技術選）
斉木について、注目を集めたのは、1986年第23回にナショナルチームから参入した沢田であった。このスラロームの名手は、数年の時をかけて、速さの時代の技術選の速さをアピールすることなく、技で対応して、上位に進出、今、完成度のスキーを見せている。ターンの舵とりを丁寧に仕上げる、とする姿勢は一般のスキーヤーの目指すべき、よい手本になる技法なのである。

Zin ski

かったのである。

『もう吉田幸一の時代ではない』といった声があがり、『優美なスキーは速さと強さの前に破れ去った』といった評価が聞こえてきた。

正確さ、美しさを求め続けてきた日本のスキーが、よりたくましく変貌しようという新たな目標が与えられた今、吉田のスキーは歴史のファイルの中に封じ込められてしまったのだろうか。第22回基礎選の上位を占めた佐藤、細野、渡部、出口、竹村らのスキーを比較した時、そこに見えてくるものは何だろうか。日本のスキーの思想のターニングポイントとなったといえるこの時、それを検証する作業は大きな意義をもつはずである。

スキーの速さ、強さ、正確さ、そして美しさとは何か。求められる『いいスキー』、『理想のスキー』とはどんなスキーだったのか。

切れるスキーと呼ばれ、走るスキー、速いスキーと評価されるスキーが、現在日本のスキー界の追い求めるスキーと思われる。

さて、そうしたスキーは、昨シーズンの基礎選では、誰によって演じられたのだろうか。

アルペン競技からなぐり込みをかけた出口、斉木、金子裕之といった新鋭たちは確かに速さ、強さで、それぞれ高い評価を得た。しかしながら、彼らのスキーは本当に速かったのだろうか。切れるスキーを彼らは演じて見せたのだろうか。

ウエーデルンと呼ばれる種目に例をとって、走るスキーというものを検証してみたい。

ジョルジュ・ジュベール氏が数年前第16回のデモ選を見て、指摘した日本人の止めるスキーと新しい世界の方向である走るスキーの差は、図でしめすと左が止めるスキー、右が走るスキーになる。

左側のスキーは、ひとつひとつのターンが最大傾斜線にスキーが交差する部分で、雪面をしっかりととらえようといった技法である。基礎選において、もっとも多く見られたのは、こうしたスキー技術だ。ターンの前半エッジが切り換わると同時にそのスキーを踏みつけ、テールを外側に押し出しながら最大傾斜線を越える。さらに体重をそのスキーにあずけて、雪面にしっかりと足場を作るといった操作で、最大傾斜線と交差する瞬間、スキーはビシッと一瞬停止する。そしてその時、下肢とスキーの反発力、そして下肢のひねりもどしを使って逆方向にスキーを振り出す。

この方法は、狭い急斜面を安全にすべり降りる技術としては、かなり有効な技法である。

ところで右の図のスキーは、左の完全にコントロールされたスキーとは異質のスキーだ。

スキーが最大傾斜線を越える部分では、雪面からの抵抗を膝を抱え込むようにして消す。そして、スキーを前に走らせるというスキーだ。左図のスキーが、最大傾斜線と交差する部分で雪面との抵抗を最大にしているのに対して、この右側のスキーは、最大傾斜線を横に切りさいていくのである。

スタートからゴールまでを直線に結ぶ線上でスキーを左右に振り出してすべる、このウエーデルンと呼ばれる演技種目では、もし、左右のスキーの振りの回数が同じであるとすれば、右の方がより長い距離をスキーは走ることになる。走るスキーとは、この右の図のようなスキーを呼ぶのである。

ジュベール氏の止めるスキー、走るスキーとは、こうした技術要素の違いを指しているのである。

さて、吉田のスキーはまさにこの走るスキーと呼ばれるスキーの要素を強く持ったスキーだったといえるはずで、それは、2シーズン前から自分の技法の改造を試み、そして身につけた技術であった。

その事情について吉田自身はこう説明している。『前はターン前半、エッジを切り換えた直後に下にスキーを踏みつけるといった意識が強かったのですが、そうしたターンを効果的に仕上げるにはかなり脚力（筋力）が必要です。僕のように体力にすぐれてもいない者がそうした技法を採るのは難しいと思うのです。そこで、前半を軽くして、ターンの後半に体重をそのまま預けてスキーをたわませ、前へ走らせるといった操作に変えてみたのです。そうしたら、楽に、スムーズにスキーが切れるということがわかったんです。僕に合

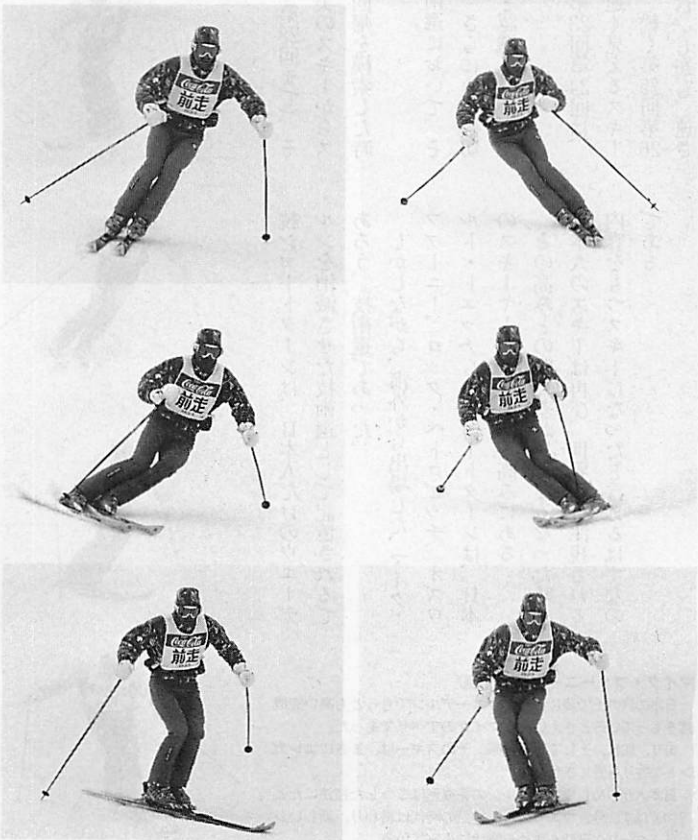
Zin Shiga

我満嘉治（93技術選）
速さがなければ、勝てない技術選に、速さをアピールして、一気に急ヴェのスターとなったヨッチは、コブの急斜面をゴムまりのようにはずんで大歓声を浴びた。しなやかでしかも敏捷な下肢を生かしたその技法は、コブの頂点を膝を胸の下に抱え込むアバルマン技法そのものであり、果敢に攻める、その姿勢は、モーグル競技のエースたちを思わせる。ペンディングと呼ぶ吸収形の技法である。

オズワルト・トェッチ（93技術選）
イタリアのスキーが求めているものはつねに速さである。ワールドカップのスラローム系種目に主役の座を占めた、グスタポ・トエニ、ピエロ・グロス、そしてアルベルト・トンバら、イタリアのスーパーエースたちの成功は、イタリアのスキー技法の優位を証明しているといえるはず。そのイタリア・スラロームチームのエースだったトェッチのスキーに鋭さ、走りを見るのは当然といえるだろう。トェッチのスキーは走る、切れるスキーなのである。

佐藤譲（93技術選）
一樹につぐスーパースターである。1988年以降の技術選は一樹、譲の時代と呼ばれている。
一樹が巧みさの頂点にあるとすれば、譲は強さのリーダーでもあろう。「つねに縦にスキーを走らせる」とする彼の姿勢は、走りと切れの時代に、新しいタイプのスキーを見せている。まだ荒っぽく見えるところが、彼の魅力なのである。

サン・クリストフのデモたち（93技術選）
オーストリアのスキー教師養成の新しいテーマは、エレガントなスキーである。ホピヒラー教授は、かつて「スキーヤーは速く、強く、正確に、と自らのスキーを鍛え上げる、それが身についた時、そのスキーは美しい」と語っているが、今、サン・クリストフの教師に求められるのは、切れと走りのスキーであり、さらに、エレガントにすべるという新たなテーマなのである。
エゴン・ヒールツェッガー（連続写真右）
ベルント・グレーバー（連続写真左）



ったスキーができたと思っています。』

吉田がパワーとスピードの時代に入ってつかんだもの、それはスキーを走らせるのはパワーではないという真理だったのである。」

吉田の技法が、師、藤本の曲進系時代の技法をようやく吸収したと言えるだろう。

速さのスキーがもたらした変革

第22回技術選での最大のテーマは速さであった。そしてこの大鰐で注目されたのはアルペン競技の世界から参入した速さの勇士たち、出口沖彦、金子裕之、そしてワールドカップのダウンヒルレーサー斉木隆であった。

そのすべりは、まさに勇壮果敢であった。とくに、斉木の総合滑降でのすべりは、それまでのデモ選でのこの種目のスピードをはるかに越えていたと思われた。

しかし、凍結した深いコブの大斜面でのウエーデルンは、藤本一門の佐藤正人のものとなっている。速さ、強さというテーマで進行していたこの第22回でも、まだ、ウエーデルンだけは、特異な種目であった。

八方尾根に戻ってからの第23回以降の技術選では、速さと強さが、勝つための必須の条件となっていたのだが、それは、日本のスキーが様式美のスキーから、スポーツとしてのスキーへの変化であり、形から動きへの流れであったと言えるだろう。

ただし、ウエーデルンは、未だ特異である。とくに昨シーズンの第30回技術選まで行なわれている、整備された緩斜面でのウエーデルンAには、長い間、日本人が愛し、求め続けてきた、古典的なすべりかたが残されている。

スタートからゴールまでを直線に結び、上体を正面に正対させ左右へのテールの振り出し幅も均等に正確なリズムで行儀よくすべるというスキー技法は、フランツ・フルトナーに始まったオーストリアのあの華のウエーデルンの再現である。走り切れという要素よりもそこで重視されるのは、正確なコントロールであり、ゆるぎないシルエットなのである。

切れと走りのスキーを目指して

第23回以降の急斜面ウエーデルン、ウエーデルン自由は、速さの時代の中で、ようやく日本人のスキーが変貌を遂げていることを実感させる種目となった。

第23回の八方の急斜面では、激しい動きで金子裕之がすべり注目を集め、第24回には我満が驚異的なスピードとリズムで大歓声を浴び、人気を集めた。

88年の第25回技術選のこの種目のトップは渡辺一樹、そして2位に我満、3位に斉木となったが、その3人の個性の中に日本のスキーの多様性を見せていたように思う。

いくつかのタイプを上げてみよう。そのひとつは、激しく戦闘的に見える、速さをアピールした、コブと戦う、はたきつけるスキーで、それは速く見えるけれど、まだ停めるスキーの範疇にあるスキーである。

もうひとつは、コブとの相性を求める引くスキーとでも言うべき、膝を深く胸の下にたたみ込むアバルマン的な流れのスキーであり、さらにコブの裏側をまわし込む押すスキーといったタイプに分けられるだろう。

そして、それらを越えて、切れと走りのスキーが見えてくる。

新しいスキーの萌芽

技術選が大鰐から八方尾根に戻ってきた時代(86年の第23回から91年の第28回まで)、それは日本のスキーが、様式美のスキーからスポーツとしてのスキーへの回帰を模索した時代であった。

速さ強さが注目された技術選において、その速さ、強さの質が問われ、さらに速さは切れと走りとして、はっきりと認識されるようになったのである。

「速くなければ勝てない」第23回第24回は、その風潮の中で、とにかく速く見えるスキーをと競い合った時代であり、続く第25回第26回は、「速くなければ勝てない。しかし、速さだけでは評価されない」とするより本質的な速さを求めた時代であった。そして、八方から第27回以降の岩鞍へと続く時代は、海外からの多くの名手たちの参加を含めて、その速さは、より高い質を求めることとなった。

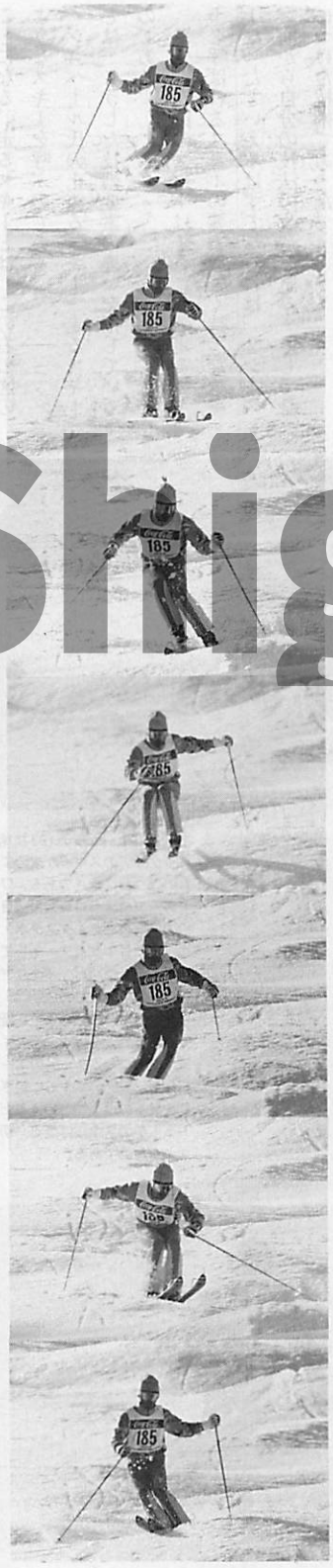
そうした、様式美から、スポーツとしてのより高い質を求める流れの中で、日本人のウエーデルンは、大きな変貌を遂げている。

渡部三郎、渡辺一樹、佐藤譲、沢田敦らは、その流れの中で、より質の高い切れ、走りを見せてこの種目のリーダーとなった。

昨シーズン、第30回技術選は、日本人の連続ショートターンは、日本人だけのウエーデルンを消滅させた技術選として記憶されるであろう、技術選であった。

しかしながら、海外から出場した、マイク・ファーニー、ロック・ペトロビッチ、オズワルト・トエッチらのショートターンは、日本のスキーヤーたちを上回る高みにある。

その高みとの間に差が見えなくなった時、日本人のスキーは再び、世界から注視される内容をもつスキーになったと言えるはずなのである。



渡辺一樹（92技術選）

日本のスキーが大きくその流れを変えた時代、その流れの先端にいたのが渡辺一樹であった。アルペン競技の世界で身につけた速さを基礎スキーの世界で、さらに研ぎすまして、一樹のスキーは、速く、強く、正確でさらに美しいという、究極の完成度を見せている。

昨シーズンは、膝の故障というハンディを負ってやや不本意なすべりを見せていたが、3連覇した当時のスキーには、高い快感度がある。

マイク・ファーニー（93技術選）

日本の雪の上で演じられたウエーデルンでもっとも高い完成度をもっているとさえいえるマイクのすべりであった。

走り、切れ、そして、安定感、そのスキーは、まさにエレガントな香りを感じさせた。

日本人が求めたウエーデルンの完成形はこうした技法にたどりつくはず。今、ウエーデルン神話の時代は終わり、新しいショートターンの理想を求める時代に入っている。

Z in Shiga